

生涯と思想を日本で初めて包括的に紹介
 J・P・バード著
 森本あんり訳

はじめてのジョナサン・エドワーズ



増井志津代

ジョナサン・エドワーズはアメリカの宗教、思想、文化を学ぶ上で重要な人物である。特に福音主義の歴史は彼を抜きには語れない。しかしエドワーズについていざ説明するとすると、正直なところ立ちすくんでしまう。このジレンマを解決する画期的な入門書が本書である。「一般の読者にエドワーズの思想とその影響を紹介すること」を目的に、イラスト漫画付きでエドワーズの生涯、思想、影響を論じている。邦訳にはエドワーズ研究第一人者の森本あんり氏があたり、的確な訳語と読みやすい文章でエドワーズ思想をすつきりまとめてくれた。

エドワーズの生涯と思想の枠組みが単に概説されるだけではない。「自由意志論」、「原罪論」等、大著の論点が、彼の体験や時代的背景との関わりの中で説き明かされる。フランクリンやジェファソン等が活躍した一八世紀啓蒙主義の時代に、伝統的改革派信仰の重要さを主張し続けたエドワーズは「最後のピューリタン」と呼ばれ、懐古主義者と誤解されがちである。しかし、実は流行思想に挑戦し、超克した思想家であった。

第一章で、読者は内省的な青年に出会う。類いまれな知性と探究心の持ち主で新思想を貪欲に吸収し、やがて啓蒙主義の強力な批判者となる。読者はこの青年の成長物語を追体験しながら、深遠で広大な思想世界を旅する。第二章では「大覚醒」におけるエドワーズの役割と神学的貢献が紹介される。「宗教的感情」をエドワーズは知的精神と結びつけた、聖霊支配下の「熱い」体験と捉え、回心の核とした。聖霊の内在を重視する思想は、ウェスレー兄弟によるメソジスト運動にも影響し、大覚醒は大西洋を越えたリヴァイヴァルへと発展する。

しかし大覚醒による成功は、結局、牧師職からの追放という苦い結果をもたらす。第三章では、教会を追われインディアン宣教に赴いたエドワーズが、辺境地開拓伝道の傍ら大著に次々に取り組む機会を得たことが紹介される。著述の目的は、当時優勢であった啓蒙主義と、その申し子一八世紀版アルミニウス主義に、改革派神学の立場から挑戦することだった。第四章で『自由意志論』、第五章で『原罪論』、第六章で『神の世界創造

の目的』、『真の徳の本性』が取り上げられ、各書の特徴と共に、思想的関連性がわかりやすく説明されていく。

「意志が主権的に自由を決定していく」とするアルミニウス主義に対して、エドワーズは「意志」を動機、傾向性、情感等、精神の他の能力と協力して働く限定的なものにとらえた。ここから導き出されるのは「自由である」と同時に「決定されてもいる」意志の有り様である。続く『原罪論』では、「契約神学」を再提示し、創造神と人間の関係回復は原罪の理解なくしてはあり得ないことを強調した。人間存在の目的は「神の創造の中心にある真の徳を経験することであり、これは「原罪」を「あがない」により克服することではしか体験されないと論じたのである。真の徳のテーマは、『神の世界創造の目的』、『真の徳の本性』でさらに掘り下げられた。エドワーズの思弁では、有徳の生は創造神を中心とした世界観によってしか達成できない。最終第七章では、エドワーズ思想の広範な影響が取り上げ

られる。

啓蒙主義が投げかける挑戦に改革主義神学の立場から応答するエドワーズに懐古的停滞はない。精神の重層性に関する指摘はウィリアム・ジェイムズのプラグマティズムやフロイト心理学にもつながる。また「原罪」や「徳」を扱った論文は正義論や公共倫理についての二一世紀的関心に示唆を与え得る。

本書では、二〇〇三年ジョージ・マーズデンが著した評伝の路線に沿いビリー・グラハムに到るまでの福音主義との連続性が強調されている。これにペリー・ミラーが指摘したエドワーズからエマソン、ジェイムズ、ニーバーに通じる思想的系譜を合わせると、エドワーズ思想が現在においても、キリスト教神学の提言できる諸課題を示し続けていることが明らかとなる。

(ますい・しつよ) 上智大学文学部教授
 (四六判・二五八頁・定価一八九〇円(税込)・教文館)

DVD版『内村鑑三全集』

二〇一一年は内村鑑三生誕一五〇周年。

岩波書店版『内村鑑三全集』(第二刷)全40巻を

電子書籍化。DVD一枚で全巻を閲覧、

検索が自由自在に出来るこの版を、ぜひこの期にご高覧、ご使用を。

お早めにご購入ください。

広告パンフレット(付申込書)進呈(ご請求を)

申込先 〒二六七〇五二 東京都杉並区荻窪一四六一三 斎藤方

内村鑑三全集DVD出版会 鈴木範久 他

頒価六三三、〇〇〇円(税込)

○教文館キリスト教書部 〇三―三五六一―八四四八

(カード決済もお受けします。)

○待農堂 〇三―三三三三―一五七七八